アル・シュミットを聴く

AAFC 例会資料

2011/08/14

担当　：　山崎　光明

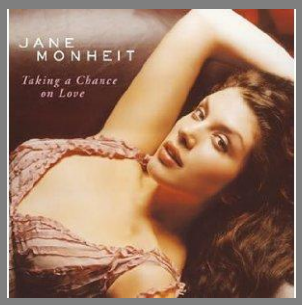
アル・シュミットは1950年代から活動していて、グラミー賞を何度も受賞しているレコーディング・エンジニアです。
イコライザーをほとんど使わず、マイクの選択とセッティングで音作りをするため、濁りが少なく透明感のあり分離のいい音を特徴としています。
今日はそんなエンジニアのアル・シュミットが携わった作品を聴いて、その素晴らしいサウンドを味わってみたいと思います。
今回紹介するほかにダイアナ・クラール、ナタリー・コール、ジョーサンプル＆ランディ・クロフォードのアルバムなどで、その手腕を味わうことができます。

ジョージ・ベンソン　アルバム「ブリージン」(1976)より『ブリージン』

アル・シュミットと言えば、プロデューサーのトミー・リピューマとのコンビでたくさんの傑作を生んでいます。このジョージ・ベンソンのアルバムはアル・シュミット本人も、人生を大きく変えることになったと語っています。
1976年の作品ですが、今聴いても全然古臭さを感じないサウンドはさすがです。
このアルバムはグラミー賞6部門受賞、ビルボード・チャートの POP、R&B、ジャズの各部門で同時1位に輝いた歴史的な名盤。

プロデューサー：トミー・リピューマ
レコーディング＆ミックス：アル・シュミット　　マスタリング：ダグ・サックス

ジェーン・モンハイト　アルバム「Taking a Chance on Love」(2004)より
『In The Still Of The Night』　『Taking a Chance on Love』



このアルバムを聴いてアル・シュミットを再認識しました。とにかく音の良さが味わえて、楽曲、演奏、歌唱ともに申し分ないすばらしいアルバムだと思います。個人的にアル・シュミットの録音で好きなのは、弦楽合奏の柔らかい音です。
『In The Still Of The Night』ではそれが存分に味わえます。
『Taking a Chance on Love』では各音の分離が良さにより、リズムが際立って躍動感が味わえます。

プロデューサー：Peter Asher & Al Schmitt
レコーディング、ミックス：アル・シュミット　　マスタリング：クレジット無し

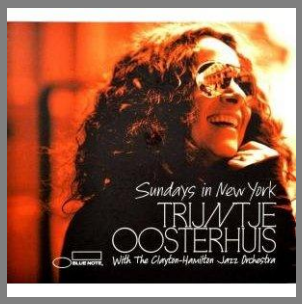
サラ・ガザレク　アルバム「Yours」(2005)より『You Are My Sunshine』

高校生の時の2000年に『エリントン・ジャズ・フェス』で“第1回エラ・フィッツジェラルド賞”を受賞したジャズ・シンガーということで、デビューアルバムにしてプロデュースとアレンジをジョン・クレイドン、レコーディングからミックスまでをアル・シュミット、マスタリングをダグ・サックスが担当するという、豪華なスタッフにより気合を入れて制作されたアルバムと言えるでしょう。
くせのない爽やかな歌声とアレンジのおもしろさが印象に残るアルバムです。

このアルバムが発売された頃、この手の女性ヴォーカル物がオーガニック系と称され、ちょっとしたブームになりました。

プロデューサー：ジョン・クレイトン　　レコーディング、ミックス：アル・シュミット
マスタリング：Doug Sax & Robert Hadley

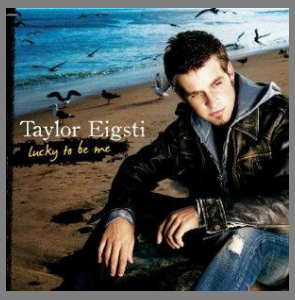
トレインチャ　アルバム「Sundays in New York」(2011) より『恋はまぼろし　(feat.フランク・マッコム)』



タイトルの通りニューヨークを日曜の午後に歩いたら、こんな感じなのだろうという雰囲気が存分に伝わるアルバムから、ゴスペル的な曲調の曲を１曲。
ブラスセクションは一つ一つの楽器がそれぞれに感じられるくらいクリアな音ですが、それが一体感を持って聴こえるのが驚異的です。コーラスワークの素晴らしさも良く伝わってきます。とにかく明るく楽しいアルバムです。
デジタル録音の良さがとことんまで出ていると思います。

プロデューサー：ジョン・クレイトン　　レコーディング、ミックス：アル・シュミット
マスタリング：Sander van der Heide

テイラー・アイグスティ・トリオ　アルバム「Lucky to Be Me」(2006) より『Woke Up This Morning』



メジャー・デビューとなったコンコード第一弾のアルバムで、2006 年度のグラミー賞にて【最優秀インストゥルメンタル作曲部門】【最優秀ジャズ・ソロ・パフォーマンス部門】の２部門にノミネートされました。
珍しくアル・シュミットがプロデュースもしているアルバムで、様々なタイプの曲が収録されていて幅広い音楽性が感じられる作品です。
そんな作品の中からジャズファンクのようなテイストが感じられる曲を１曲。
細かく速いリズムの上を伸び伸びとソロを展開していくのが印象的です。
ベースがクリスチャン・マクブライド、ドラムがルイス・ナッシュと豪華です。

プロデュース、レコーディング、ミックス：アル・シュミット　　マスタリング：ダグ・サックス

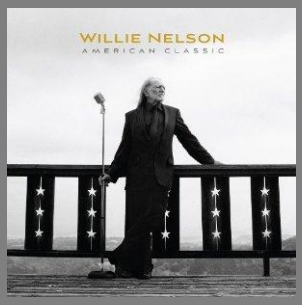
ブライアン・ウィルソン　アルバム「Reimagines Gershwin」(2010) より『Nothing But Love』

元ビーチボーイズのリーダーでヴォーカルとベースを担当していたブライアン・ウィルソンがガーシュインをカバーしたアルバムです。誰の曲を歌おうと自分の色に染め上げてしまう手腕は凄いです。思わず繰り返し聴いてしまう傑作アルバムです。
アル・シュミットはミックスだけの担当ですが、それでもいい仕事をしてます。複雑なコーラスワークが聴き物です。アメリカのポップソングの良さが凝縮されていると感じられます。

プロデューサー：ブライアン・ウィルソン　　ミックス：アル・シュミット
レコーディング：Mark Linett　　マスタリング：Bob Ludwig

ウィリー・ネルソン　アルバム「アメリカの歌」(2009) より『 Baby It's Cold Outside (feat. Norah Jones)』

『Always On My Mind』



自身が 70 年代に残した名盤「スターダスト」が発売 30 周年を迎え、その第 2 弾的に制作されたアルバム。完全にノラ・ジョーンズに引っ張られているデュエットとエルヴィス・プレスリーの名曲のカバーを聴きます。
リバーブ（残響）をけっこう深くかけているのですが、かけ方が絶妙で音が埋もれることなく、うまく優しい雰囲気を作っているのが素晴らしいです。
ヴォーカルをとにかく前面に出しているのに、くどく感じられない扱い方が絶品です。

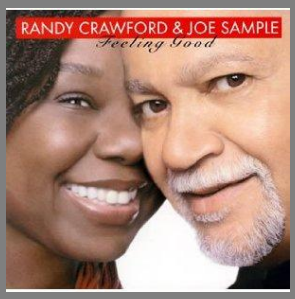
プロデューサー：トミー・リピューマ　　ミックス：アル・シュミット
レコーディング：Al Schmitt, Steve Genewick　マスタリング：ダグ・サックス

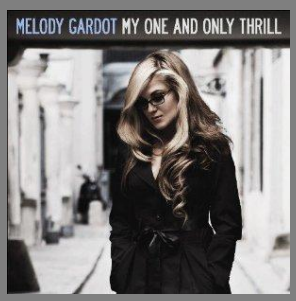
松任谷由実　アルバム「そしてもう一度夢見るだろう　(AND I WILL DREAM AGAIN.) 」(2009) より
『まずはどこへ行こう』

アル・シュミットはたびたびＪ－ＰＯＰのアーティストと仕事をしています。
日本で日本人のエンジニアにより録音を行い、アル・シュミットがミックスを担当しています。
このアルバムでも強引な音作りや過剰な作りこみのない、いい意味で力が抜けている感じが好印象です。
渋いアルバムでかつてのようにインパクトのある曲はないのですが、大人な雰囲気が全編に感じられる傑作アルバムだと思います。
この曲はゆうばり国際ファンタスティック映画祭 2009 応援イメージソングでした。

プロデューサー：松任谷正隆　　ミックス：アル・シュミット　　マスタリング：バーニー・グランドマン

本日紹介できなかったアルバム以外にもたくさんいい作品がありますので少し紹介します。





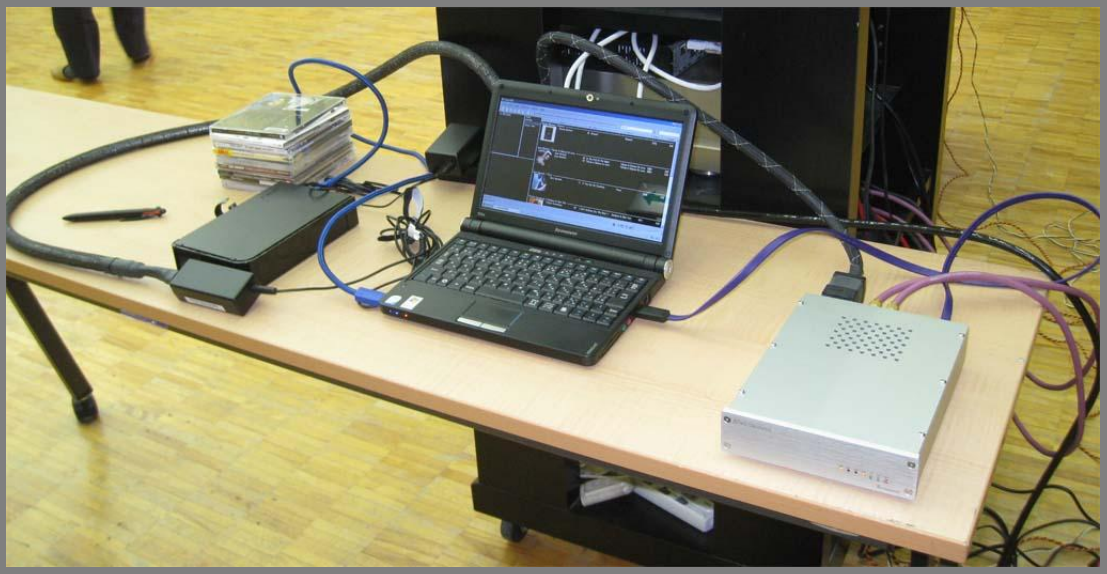
左から**バーブラ・ストライサンド「Love Is The Answer」**
このアルバムは１枚のものと２枚組みのものがありますが２枚組みのものがおすすめです。
同じ曲目をオーケストラアレンジをバックにした１枚とダイアナ・クラールのカルテットをバックにした１枚で２枚組にしているユニークなアルバムです。両方の演奏を聴き比べる楽しみがあります。

ランディ・クロフォード＆ジョーサンプル「Feeling Good」
ジョー・サンプルは昔からたびたび一緒に仕事をしています。かつて名盤を何枚も一緒に作ったランディー・クロフォードをヴォーカルに迎えた傑作です。これもプロデューサーはトミー・リピューマ

メロディー・ガルドー「My One & Only Thrill」
ファーストアルバムが全世界的に売れに売れたメロディー・ガルドーのセカンドアルバム。
独創的な楽曲はこのアルバムでも健在。プロデューサーにラリー・クラインを迎えているので、ストリングスが聴きものになっています。

ダイアナ・クラール「LOOK OF LOVE」
アル・シュミットはトミー・リピューマとともにダイアナ・クラールの多くの作品に関わっています。
数が多いので一つ選ぶのは難しいですが、2001 年度グラミー賞 ベスト・エンジニアード・レコーディング ノン・クラシカル部門を受賞したこのアルバムを紹介します。

本日の再生機器
本日はＣＤプレーヤーの代わりに、ＰＣを使用したいと思います。
ＰＣ：レノボ　Ｓ１０ｅ　　ＤＡＣ：タコ電子ＥＢｉ　　ＯＳ：WindowsXP Home
再生ソフト：foobar2000＋ASIO4ALL



ＰＣは音楽再生以外の機能をとことん削った状態にして、音質を追求しています。
ウィンドウズでも極限まで機能を削ると、なかなかの実力を発揮することを感じてもらえたらと思います。

nuDGe! nuDGE!! of Tomita Lab

お茶の間的ラボ目線

vol.21

プロフェッショナル アル・シュミットの流儀

お茶の間的ラボ目線

KEIICHI TOMITA

プロフィール　冨田恵一
キリンジ、MISIA、平井堅、中島美嘉、RIP SLYME、他数多くのアーティストを手がける音楽プロデューサー。セルフプロジェクト“冨田ラボ”として今までに3枚のアルバムを発売。
http://www.rhythmzone.net/tomitalab/

Live Infomation

5年ぶりワンマン、一夜限りのLIVE 決定!
『冨田ラボ LIVE ―COMBO―』
ゲストシンガー：坂本真綾、秦 基博、bird、Hiro-a-key
5/20（金）
会場：ブルーノート東京
ファーストセット：17:30開場／19:00開演
セカンドセット：20:45開場／21:30開演
http://www.bluenote.co.jp/

クレジット買い――といってもカードや分割でモノを買うアレではありません。CDやレコードに記載されている人名を指標として「これ買おうっ」と音楽ソフトを購買するやりかたのことで、ベテラン音楽ファンなら当たり前のようにやってきたことでしょう。かく言う僕もライブラリーの7割くらいはそういったやり方で増やしていったような気がします。お気に入りのプレイヤー、プロデューサー、アレンジャー辺りを追いかけるのが一般的ですが、さらに〈エンジニア買い〉というやり方も存在します。お気に入りのプロデューサーやプレイヤーと同様に「この人がやっているなら間違いなくあの気持ちよい音を聴かせてくれるだろう」といったようにかなりの確率で素晴らしい音楽を提供してくれるエンジニアもいるのです。今回はエンジニアにスポットを当ててみましょう。

まず僕が間違いなくエンジニア買いをしてしまう一人にアル・シュミットがいます。60年代から現在まで現役で活躍している大ベテランで、ジャズ・フュージョンを語るにもトミー・リピューマ絡みで必ず名前があがる人――実は2000年までは特に注目していなかったんですがね（笑）。理由は後述。勿論2000年に急に彼の方向性が変わったりした訳ではありません。〈聴き手である僕自身の変化〉によるのは当然ですが、YAMAHA NS-10M studioというスタジオ定番のスピーカーの使用をやめた時期とも重なりますので〈再生環境の変化〉も大きな要因だったのだと思います。解像度アップに伴い、凄さが見えちゃったって感じっすかね。彼は本当の意味でベーシックな、そして奇をてらうことのないエンジニアなので、後述するチャド・ブレイクのように聴き手を〈エンジニアリングで圧倒する〉ようなことはありません。どこまでもスムーズでゴージャスな空間、パーフェクトなバランス、かつ絶妙なダイナミクス、といった方向の彼の音は聴き手にエンジニアリングを意識させず、音楽そのものへのフォーカスをより深く、そして持続させてくれるのです。特に近年、大編成をバックにした歌もので、録音からミックスまで彼が手がけたものにハズレはありません。全ての作品が素晴らしいです。言ってみればコンサバティヴな音楽をベーシックなテクニックで録音、ミックスしている訳ですが、録音について極めようとしている人間、それも深ければ深い程、彼に驚異＝脅威を感じるでしょう。そう怖いくらいに凄いですね～。マイクのセレクト、セッティングによって音を決め、ほとんどEQ（あとで音色を調整する機材）しないとか、大編成の複雑な曲を録音する時にパっと立ち上げた時点で全てのトラックのピークがぴったりマイナス3だった、とか色々とレジェンドもあります――まぁこういう話しには尾ひれがついている場合も多いですけど（笑）。制作者的観点から凄いな～ってところは勿論沢山ありますが、そんなことより、とてつもない気持ちよさを変わらず提供してくれているからこそ、クレジット買いしてしまうわけです。ではそんな彼のかかわる作品に以前はあまり注目していなかった理由はなんでしょう？ それはやはり〈音楽家の提示する音楽を余すところ無く、そして最高の効果を発揮できるであろう音で録る〉という姿勢によるのだと思います。？ 一見悪いところありませんよね？ はい、エンジニアの姿勢としてかくあるべき素晴らしい姿勢です。ただその場合、音楽家が提示したものが最高の場合は〈内容も音も全て最高！〉になる訳ですが、それなりの場合は〈良い音のそれなりの音楽〉になってしまう訳で、アル・シュミット＝間違いないといった公式にはならなかったんですね。ただ大ベテランの域に達した現在、最高の音楽を提示できる音楽家以外とは仕事をしていないようです。アル・シュミット＝間違いないといった公式が出来上がりました。

と、今回はアル・シュミットのみになってしまいました。次回はその対極に位置するであろうチャド・ブレイクのお話からっ。

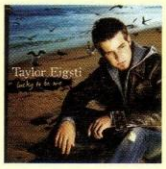
レコーディング・エンジニアという職業は趣味嗜好という曖昧さが許容される音楽界の中にあっても、プロフェッショナルか否かを明確に判断し得る職業です――制作環境にいる人間でさえ忘れがちですが。そしてまた、プロフェッショナルと一口にいっても彼らがみな同等のレベルであるわけではありません。一握りの世界最高峰とそうではない多数、という図式はどの世界でも一緒だと思います。現在日本では国家的、いや世界的危機を収束させる為に世界最高峰の頭脳と技術が投入されている、と切に願いますし、そう信じたいのです。2011年3月30日時点でそう思います。

'00年以降のアル・シュミットの仕事から冨田セレクションの4枚

CD
『ラヴ・イズ・ジ・アンサー』
Barbra Streisand
[Columbia/ ソニー SICP-2442]
（2009）

CD
『ビフォー・ミー』
Gladys Knight
[Verve/
ユニバーサル UCCV-1094]
（2006）

CD
『サレンダー』
Jane Monheit
[Concord/
ユニバーサル UCCO-1002]
（2007）



CD
『ラッキー・トゥ・ビー・ミー』
Taylor Eigsti
[Concord/
ユニバーサル VICJ-61352]（2006）

2010年４月発行　タワーレコードのフリーペーパー「ｉｎｔｏｘｉｃａｔｅ」より

２０１１年８月１４日　ＡＡＦＣ例会発表　山崎光明